

プログラム・ノート

解説=飯尾洋一

歌心に満ちた美しいメロディの数々を

本日はチェコを代表する作曲家、ドヴォルザークの作品を中心としたプログラムが組まれました。交響曲からオペラまで幅広い分野に傑作を残したドヴォルザークですが、どんな作品を聴いても感じられるのが、メロディの美しさ。のびやかで温かく、まるで民謡のように自然なメロディにあふれています。本日演奏されるどの作品にも、そんなドヴォルザークならではの魅力がぎっしりと詰まっています。

指揮の大井剛史は「ドヴォルザークはいちばん好きな作曲家」だと言います。マエストロの作曲家への深い理解と豊かな共感が東京フィルから名演を引き出してくれることでしょう。

名ソプラノ、森麻季の歌唱も本日の大きな聴きどころ。ドヴォルザーク、山田耕筰、プッチーニの名曲が歌われます。清澄でみずみずしい声は、人間の声が最高の楽器であることを教えてくれます。



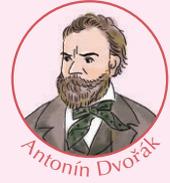
©Yuji Hori

©K.Miura

美しいメロディの数々をマエストロ大井のタクトと、森麻季さんのみずみずしい歌声でお届けします

哀感と野趣に富んだ軽快な舞曲

アントニン・ドヴォルザーク (1841-1904) は1891年に50歳を迎え、プラハ大学から名誉博士号を授与されます。その返礼として作曲されたのが、**序曲『謝肉祭』**。序曲にはオペラや劇のオープニングテーマとして作曲される作品もありますが、この序曲はいわゆる演奏会用序曲。三部作『自然、人生、愛』の2曲目として作曲されましたが、序曲単独で完結しており、特定のストーリーとは結びついていません。



毎年2～3月頃にプラハ旧市街を中心に行われるカーニバルでは、様々な衣装で仮面をつけた人々によるパレードが見どころ stock.adobe.com

曲は盛大に開始されます。謝肉祭（カーニバル）の賑わいが目に浮かぶようなお祭り気分にあふれています。飲めや歌えの大騒ぎが一段落すると、哀愁を帯びたのびやかなメロディが奏でられます。中間部は幻想味豊か。最後はふたたび喧騒とともに喜びを爆発させます。

子に向き合う母親の心情を歌う

ドヴォルザークが残した歌曲のなかでもっとも有名なのが、「**わが母の教えたまいし歌**」。1880年に作曲された歌曲集『ジプシーの歌』作品55の第4曲として収められた一曲で、多くのソプラノ歌手に愛唱されてきました。

詩の作者はチェコの同時代の詩人、アドルフ・ヘイドゥック (1835-1923)。歌詞では子に向き合う母親の心情が歌われています。老いた母親がわたしに歌を教えてくれた頃、いつも涙を浮かべていた。今、わたしが幼い子に歌を教えると、やはり涙がしたり落ちる……。わが子を見て、自分の子供時代の記憶がよみがえることはよくあること。時の流れに思いを馳せずにはられません。



アドルフ・ヘイドゥック
(1835-1923)

月の光に照らされながら歌う恋心

ドヴォルザークは生前に10作を超えるオペラを作曲しています。そのなかで唯一、現在も国際的に上演される人気レパートリーに定着しているのが『ルサルカ』です。

ルサルカとはスラヴ神話に登場する水の精の名。森の奥に住むルサルカが、ある日、人間の王子に恋をします。ルサルカは、魔法使いにお願いして、自分を人間の姿へと変えてもらいますが、その代償として口がきけなくなってしまう。王子は美しいルサルカに心を奪われて結婚します。しかし、やがて言葉をしゃべれないルサルカに不満を抱き、心変わりします。ルサルカは悲しみ、水の精に戻ろうとしますが、そのためには王子の命を奪わなければなりません……。

第1幕で、ルサルカが人間になる前に歌うのが「月に寄せる歌」。月の光に照らされながら、王子への恋心を歌います。



1901年3月に『ルサルカ』が初演されたときのルサルカ役だったルジエナ・マトゥロヴァ

11/24

渋谷の
午後のコンサート

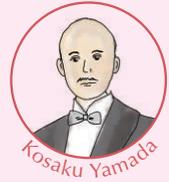
11/27

休日の
午後のコンサート

月の光が幻想的な、ブルタヴァ川から望むプラハ城

stock.adobe.com

日本人の郷愁を誘う山田耕筰の童謡



山田耕筰 (1886-1965) は大正・昭和期の日本楽壇で主導的な役割を果たした作曲家。1910年よりベルリンの王立アカデミー高等音楽院で作曲を学び、帰国後、日本におけるオーケストラ運動やオペラの実現に向けて尽力しました。1922年には北原白秋とともに雑誌「詩と音楽」を創刊し、日本語と西洋音楽を融合させる歌曲の創作に取り組みます。そして、日本語の自然な抑揚を生かした歌曲を作り出しました。

北原白秋作詞の「**からたちの花**」(1925年)、三木露風作詞の「**赤とんぼ**」(1927年)、北原白秋作詞の「**この道**」(1927年)は、いずれも日本人ならだれもが耳にしている名曲でしょう。「赤とんぼ」は日本でもっとも歌われている童謡かもしれませんね。

元カレの気を引こうとするムゼッタの歌



イタリアのオペラ作曲家 **ジャコモ・プッチーニ** (1858-1924) の作品でもとりわけ人気が高いのが『**ラ・ボエーム**』。

パリを舞台に、若く貧しい芸術家たちの愛と友情が描かれます。ストーリーの中心となるのは、詩人のロドルフォとお針子のミミのロマンスですが、このふたりと対照的なカップルが画家のマルチェットとその元恋人である歌手のムゼッタ。金持ちのパトロンと羽を伸ばしているムゼッタが、カフェでマルチェットを見つけると、「**私が街を歩けば**」を歌って気を引こうとします。最初は無視していたマルチェットも、だんだんがまんできなくなってきました。

お金だけの関係のパトロンと、貧乏な元カレ。ムゼッタが本心からつきあいたいのはどちらなのか、言うまでもありません。



1896年2月に『ラ・ボエーム』が初演されたときのポスター

非凡なメロディメーカーぶりがわかる傑作交響曲

「あいつがゴミ箱に捨てたスケッチだけでも一曲書けそうだ」。これはドヴォルザークの非凡なメロディメーカーぶりを称えたブラームスの言葉。ドヴォルザークの才能にいち早く気づいたブラームスは、ベルリンの出版業者ジムロックにドヴォルザークを推薦します。これをきっかけに書かれたスラヴ舞曲集で、ドヴォルザークは大ブレイクを果たしました。

当初、ドヴォルザークとジムロックの協力関係は良好だったのですが、やがて両者の間に溝ができます。ドヴォルザークはスラヴ舞曲のような気軽な作品よりも、交響曲のような大作にエネルギーを注ぎ込みたい。しかしジムロックは売れない交響曲よりも、気軽な作品を書いてほしい。交響曲第8番を書いた際、ついにドヴォルザークはジムロックからの出版を断念し、楽譜をイギリスのノヴェロ社から出版することに決めました。そんな経緯もあって、かつてこの曲は「イギリス」という愛称で呼ばれていました。といっても曲の性格はまったくイギリス的ではなく、チェコらしい民謡風の親しみやすいメロディに彩られています。

第1楽章 アレグロ・コン・プリオ チェロがメランコリックな主題を奏でると、フルートが楽しげな主題で応えます。熱気に満ちた楽想がくりひろげられます。

第2楽章 アダージョ どこか懐かしさが感じられるメロディで開始されます。木管楽器が小鳥のさえずりを思わせます。

第3楽章 アレグレット・グラチオーソ 切なく優美なワルツが奏でられます。終結部は一転して陽気に。

第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo 威勢のよいファンファーレで開始され、主題と変奏が続きます。表情を次々と変えながら、力強いクライマックスを築きます。

いいお・よういち（音楽ジャーナリスト）／著書に『クラシック音楽のトリセツ』（SB新書）、『R40のクラシック』（廣済堂新書）、『マンガで教養 やさしいクラシック』監修（朝日新聞出版）、『クラシックBOOK』（三笠書房）他。雑誌やウェブ、コンサート・プログラム等に幅広く執筆する。テレビ朝日「題名のない音楽会」他、放送でも活動。

11/24

渋谷の
午後のコンサート

11/27

休日の
午後のコンサート